

Tamara Jacka, Rural Women in Urban China: Gender, Migration, and Social Change

著者	大橋 史恵
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	48
号	12
ページ	73-76
発行年	2007-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00040972

Tamara Jacka,

*Rural Women in Urban
China : Gender, Migration,
and Social Change.*

Armonk : M. E. Sharpe, 2006, xii + 329pp.

おお 橋 史 恵
大 橋 史 恵

はじめに

1970年代末の改革・開放そして社会主義市場経済レジームへの移行を経て、今日までのあいだに中国社会は光も陰もともなう大きな変化を遂げている。国全体としては「與世界接轨」（世界と軌道を接する）というスローガンを掲げ、7パーセント台から10パーセントを超える経済成長率を打ち出しているが、国内事情に目を向ければ都市-農村や沿海部-内陸部の経済格差、失業や就職難の増加、社会保障制度の欠落などがあらわになっている。

こうした現象のなかでもとりわけ注目を集めているのが農村出身者の都市への移動をめぐる問題であり、1990年代末から国内外の研究者や行政関係者、メディアが膨大な量のレポートやプロジェクトを打ち出している。それらは人口や経済動向についてマクロにとらえたものから、居住問題や治安、労働などの具体的課題をとりあげたものまで多岐にわたるが、多くは農村出身者を短期滞在者であれ定住者であれ「流動人口」（戸籍のある地を離れている人口）という集合的概念のなかに把握している。

本書の著者であるTamara Jackaは、このような先行研究や報道が往々にして、都市における農村出身者をどのように「管理」するかという視点に沿っていることを指摘し、現実の農村出身者、とくに女性たちの行為主体性（agency）に目を向けた研究をおこなってきた。その視座の根底には、既存の移動研究全般において女性は家族や夫にとまって移動

することが想定されており、その経済活動や政治的影響力が等閑視されてきたことへの批判がある。この試みの一環として、本書は農村出身者を集合的にとらえることを避け、農村出身女性の個々の経験というマイクロかつ質的なデータを参照しながら農村-都市間の人口移動を読み解きなおそうとする。主に依拠するのは北京における女性移住労働者の自助支援組織「打工妹之家」における聞き取りと参与観察（2001~02年）、北京市海淀区の農村出身者コミュニティにおける聞き取りの記録である。さらに雑誌『農家女』や『打工妹』の記事や農村出身女性の手記、「打工妹之家」の設立者や支援者への聞き取り、「打工妹之家」でのアンケート調査の結果などを分析材料として用いている。このような豊富な一次資料を基に、本書は市場経済期中国におけるジェンダー配置（個人や集団としての女性/男性のあいだで、資源配分や役割をめぐって編成・再編成される関係）や、それと深いかかわりをもつ社会政策や制度、言説について検討している。実証的な手法を用いているが、農村-都市という二項的区分の自明視や、農村出身者や女性を一枚岩の集団としてとらえる思考を脱構築しようとする姿勢を貫いている。

内容を具体的にとりあげる前に、著者について紹介しておきたい。Jackaはオーストラリア国立大学太平洋アジア研究大学院・ジェンダー関係センター（Gender Relations Center）の上席研究員であり、1980年代末から北京や杭州の農村出身者コミュニティ、山東省、四川省の農村においてフィールドワークを重ねてきた。その成果は本書のほか、1994年にアデレード大学に提出した博士論文をもとにしたJacka（1997）や、Arianne M. Gaetanoとの共同編集による論文集[Gaetano and Jacka 2004]などにまとめられている。中国の農村女性とその移動をめぐるジェンダー分析にもっとも早い時期から取り組んできた研究者の一人である。

I 本書の構成と内容

序 論 「周縁」から「中心」へ
第1部 主体

第1章 「農村の白痴性」と「都市の近代性」
の狭間
第2章 働く姉妹たちの集合
第2部 場
第3章 場に入って／疎外されて
第4章 欲望の場
第3部 人びと
第5章 関係性
第6章 アイデンティフィケーション
第4部 時間
第7章 語り，時間，行為主体

序論は、ポストモダン・フェミニズム理論のキー概念を現代中国のジェンダー関係に結び付け、本書全体を貫く理論枠組みを示している。分析対象として経験を採用するにあたり、著者はそれが個人のものでありながら社会实践や言説によって形作られていること、そして個人のアイデンティティや主体位置 (subject positions) はこの過程を通じて生成するものであることを指摘する。個人がその経験において主体位置を拒絶することは可能である。例えば「農民」というラベルを与えられた者が戸籍のある地を離れて暮らすことや、子どもを農業戸籍にも非農業戸籍にも登録しないで産み育てることはありうる。しかし戸籍管理を逃れることは社会的排除を示す「認識対象外／おぞましき」(abject) の位置をもたらすものである。

しかし著者は主体位置を支配的言説や権力との関係においてのみとらえるのではなく、主体の遂行的行為 (performance) によって変動する、幅をもつ概念として把握していこうとする。農村出身女性の主体とその経験、主体位置をとりまく言説や社会関係の相互構築性をあきらかにすることで、「周縁」と「中心」の関係 (ジェンダーや農村と都市の関係) を所与の二元的構造としてではなく、常に再編成されるものとして見直すことができるのではないか——本書の議論はこのような視座に基づいて組み立てられていく。

第1章は中国における「モダニティ」概念から農村—都市関係の系譜をたどりながら問題の背景を描

写する。著者は、国家発展がモダニティに帰結するという19世紀以降のエリート近代主義の思考が今日の中国の農村—都市関係に連続的につながっているとして、以下のように指摘する。第1に、居住地(農村—都市)と職業(農業—非農業)をめぐる差異化のプロセスが不平等性を構築している。第2に、かつて農業の集団化の過程において農民たちは「訴苦」(苦難のアピール)を通じて行為主体性を獲得していたが、その後はこのような機会が制約され、農民は自ら語る「主体」ではなくなった。第3に、農村がかかえる低開発の要因が農民自身の質に帰せられた。最後に、市場指向型の改革のなかで農民の「他者化」が進んでいる。メディアは農村出身者たちについて、あるときは後進性や犯罪と結び付け、あるときは経済発展の英雄や見習うべき勤勉なモデルとして描く。またあるときは農村出身者を社会的弱者ととらえることで都市居民の優位性を保つ——中国の国家アイデンティティは、このような「内なるオリエンタリズム」の構図によって再構築されている。

第2章では1990年代後半から出現した非政府組織や新しいメディアの活動に目を向ける。中国における市民運動の台頭ともいえるが、この現象もまた農村出身者の「他者化」と背中合わせである。分析の中心となる「打工妹之家」は、婦女連合会関係のメディア関係者を上部にもち、上意下達的なシステムの下で「農村女性の『素質』(人間の質)を高める」ことをめざしてきた。この点で「打工妹之家」はナンシー・フレイザーのいう「下位の対抗的な公共性」(subaltern counterpublic) とはいえない。しかしこの方式は海外の研究者や資金財団の批判を受けてきた。さらに「打工妹之家」に参加する農村女性たちはその活動への不満を認識することで「自分たちのアイデンティティ、利害関心、要求をめぐってそれを覆すような解釈を定式化する対抗的な討議を考えだし、流布させていく」ことになった〔フレイザー 1999〕。結果として2000年代に入ってから「打工妹之家」は農村出身女性の主体的参加を前提とする組織へと改変を重ねている。

第3章は農村出身女性たちが受けている制約について、制度的背景とケーススタディーを示す。中国

において農村女性の状況を規定する制度の最たるものは戸籍制度である。投資家や高学歴の専門家などに戸籍の購入が認められている一部の都市を除けば、農村出身者が都市に戸籍を移すことはできない。農村女性が都市男性と結婚し出産しても、子に都市での戸籍登録を認められない状況も近年（北京では2003年）まで続き、戸籍をめぐる制約は家族形成にも影響を及ぼしてきた。一方で農村では「出嫁女」（村の外の相手と結婚した女性）の土地請負経営権を確実に保障するための制度がないなど、女性の生活基盤はそもそも脆弱である。すなわち農村女性たちはそのライフコースを通じて安定した「場」をもてない状況にある。

こうした制約にもかかわらず、多くの農村女性たちは都市へと移動している。第4章は第1章でとりあげた都市における発展とモダニティの言説を、農村女性たちがどのように受け入れているかを分析している。聞き取りを通じて浮き彫りになるのは「打工妹之家」にやってくる若い女性たちと、海淀区の既婚女性たちとの差異である。「打工妹」たちは農村に残り結婚することを選べば、土地請負経営権の問題や、父方居住婚・族外婚にともなう不自由さに直面することを認識しており、都市に自己実現の可能性をかける。一方で既婚女性たちは自らの可能性には関心を示さず、もっぱら家族の生活維持や子どもの将来について考えている。しかしいずれのケースにおいても、都市はモダニティ、若さ、欲望、発展の場として認識されている。

第5章は先行研究でしばしばとりあげられる「孝行娘」／「反抗的な娘」モデル [Lee 1998他] や、夫に付随する移住者として女性をとらえる従来の開発経済学モデルを批判的に参照しながら、農村―都市、過去―現在―将来という空間や時間を移動する女性たちが自らの主体位置をどのようにとらえようとしているかを検討している。著者の観察からは郷里の伝統的価値観を拒絶しつつも家族との信頼関係をつなごうとする「打工妹」たちや、夫の経済的行為と必ずしも結び付かないかたちで意思決定をおこなう既婚女性たちの姿が見えてくる。

第6章は農村出身女性たちのアイデンティティに

ついて分析する。彼女たちは「田舎者」、「都会者」の線引きを自ら再生産し、前者に自らを位置づけつつも、後者を必ずしも優位とはとらえない。ときに都市の人間の服装や性に関するモラル、思いやりのなさを批判し、「文明性」に疑いのまなざしを向ける。

終章である第7章は農村出身女性の語りに着目する。海淀区で集住する既婚女性たちのあいだでは、「農村経済戦略としての移動」が語られる。1990年代初中期の北京や杭州の「打工妹」たちは農村女性のライフコースにおける「幕間としての移動」について語った。「逃避としての移動」を語る女性や、より前向きに「運命を変える移動」や「自己を高めるための移動」を語る女性たちもいる。このような彼女らの語りはときに支配的言説と相反する。「農村経済戦略としての移動」、「幕間としての移動」の語りはいずれも、農村―都市間の分断をおびやかすものではない。しかし彼女らの意識は、国家・国民の「発展」を志向する中国政府の言説とは相容れない。一方で「逃避としての移動」、「運命を変える移動」、「自己を高めるための移動」を通じて旧来の価値観や農村―都市間の分断を越えていこうとする女性たちは、農村社会にとっても都市社会にとっても脅威となる存在である。だが個人の発展や物質的豊かさ、社会的地位の向上を求める意識は、政府の言説と轍をともにする。国家発展そして農村出身女性個人の発展において、当人たちの主体が犠牲となる構図が浮かびあがる。

著者はこのような構図を打ち破る可能性として、今日の状況における「訴苦」をとりあげる。「打工妹之家」とのかかわりを通じて農村出身者たちが自ら組織化し行動することの困難を知った Zhou Ling は、農村―都市関係が社会秩序のなかで構築されていることをとらえ、普遍的な人権意識に向けて語りかける。この語りに反映されるように近年、人権問題をめぐる批判が社会に広がっており、中央政府の指針にまで影響を与えている。ここから著者は、資本主義的な社会経済秩序が変化していく可能性を遠望的に示唆し、本書を締めくくっている。

II 本書の評価

本書は10年以上のフィールドワークに基づく膨大かつ詳細なエスノグラフィや農村女性たちの語りや手記を通じ、市場経済期中国のジェンダー秩序を多角的にとらえている。質的アプローチに基づく検討が少ない現代中国研究において重要な意味をもつ文献である。議論の特徴は、ポストモダン理論を経たフェミニストアプローチの視座から農村と都市の二項的区分の社会構築性をあきらかにしながら、このかわりにおいて女性の移動を把握しようとしている点にある。従来の移動研究と異なり、著者の目的は夫や家族への付随、経済行動、自己実現など「移動の要因モデル」を特定することにはない。女性たちの主体位置を規定する社会的・経済的状况をとらえながらも、個々の女性たちによる語りや公共空間の形成によって位置に「ずれ」が生じる可能性も見出している。移動研究にとどまらず、ライフヒストリー分析や社会運動論とつながる多角的アプローチから、現代中国の社会構造の変化をダイナミックに描き出しているといえる。

検討課題をあげるなら、第1に都市居民の状況がやや静態的・一面的に描かれているように思う。農村出身女性たちが従属的な被抑圧者像にとどまらないのと同様、都市居民たちもまた多様な現実を生きている。例えば市場経済化のなかで職を失った国有企業労働者や、下放政策によって農村生活を送ったかつての「知識青年」と、農村出身者との関係は単純なヒエラルキーの構図のなかには位置づけられないのではないか。農村—都市秩序の再編成のなかで、都市居民の主体位置がどのように変化していくのかを追うことも可能であろう。第2に、2002年の第16回全国人民代表大会において「三農問題」（農業、農村、農民）が政治的課題としてとりあげられて以

来、都市の農村出身者をめぐる状況はめまぐるしく変化しているが、著者のフィールドワークはそれ以前の期間におこなわれたものであり、近年の動向については政策の変化について簡単にふれるにとどまる。本書が描き出しているのは、一時的な（しかし重要な）通過地点ととらえる必要があるだろう。農村—都市間のジェンダー秩序はいままさに再編成の過渡段階にあり、継続的な観察と検討を要している。

文献リスト

<日本語文献>

フレイザー、ナンシー 1999. 「公共圏の再考——既存の民主主義の批判のために——」 クレイグ・キャルホーン編/山本啓・新田滋訳『ハーバマスと公共圏』未来社 117-159ページ [原著はFraser, Nancy 1992. "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy." In *Habermas and the Public Sphere*. ed. Craig Calhoun, 109-142. Cambridge, Mass.: MIT Press].

<英語文献>

Gaetano, Arianne M. and Tamara Jacka eds. 2004. *On the Move: Women in Rural-to-Urban Migration in Contemporary China*. New York: Columbia University Press.

Jacka, Tamara 1997. *Women's Work in Rural China: Change and Continuity in an Era of Reform*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lee, Ching Kwan 1998. *Gender and the South China Miracle: Two Worlds of Factory Women*. Berkeley: University of California Press.

(お茶の水女子大学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員)

お詫びと訂正

本誌第48巻第12号に下記の誤りがありましたので、お詫びして訂正いたします。

記

箇所：76ページ左段下から3行目

誤 第16回全国人民代表会議
正 第16回中国共産党全国代表大会